

オランウータンの保全に向けての現状と課題

福守 朗

現代の動物園において保全と動物福祉は重要な課題となっている。野生動物の個体群を動物園等で長期にわたり管理し維持すること、すなわち生息域外保全は以前から動物園で取り組まれてきたが、国内のオランウータンにおいては楽観できる状況ではない。ボルネオオランウータンは20年前の2001年には国内の16園で37頭飼育されていたのに対し、2021年現在12園で31頭と減少している。全個体の54%(31頭中17頭)が血縁関係にあること、若齢個体にメスの割合が少ないこと、全体的に高齢個体が多いこと、霊長類の検疫が嚴重になり国外から新規個体を導入するのが極めて困難なこと、などが繁殖計画の推進を難しくしている。単独・単性飼育している園が42%(12園中5園)を占めるのは、それらのこととも関連がある。当園においても21歳のオスが単独飼育されていて、メスの新規個体導入が望まれる。「遺伝子を次世代に残す」と同様に、交尾や育児等を含む一連の行動も世代を越えて伝えられなければならない。類人猿においては、子に対する養育行動の発現には幼少期の経験に基づく学習が深く影響する。動物園では育児放棄されるケースもある一方で、人工哺育になったオランウータンの子を別の動物園で代理母へ託す試みに成功した事例がある。このような技術の蓄積と共有が進められたら理想的である。動物園は域外保全への貢献だけでなく、域内保全の取り組みも進めている。当園は認定NPO法人ボルネオ保全トラストジャパンと6つの園が行う「ボルネオ保全プロジェクト」に参画し、職員がボルネオ島へ視察に出向いた上でワークショップの開催等の教育普及活動に活かしている。また寄付型の自動販売機を園内に設置したり、利用額の一定割合が寄付されるWAONカードを販売して保全活動に係る資金調達の一助とする試みを始めた。今後もオランウータンの保全活動に総合的に貢献できるよう努めたい。

○日本の動物園と世界の生物多様性シンポジウムにて講演

令和3年11月19日(金)

WEB開催(帝京科学大学主催)